

南紀・台高 堂倉谷

比良・明王谷 奥ノ深谷

日程：2010年4月29～5月1日

メンバー：L三井、白土、釧持(感想文作)

さがみ山友会に入って最初の大型連休。せっかくの休みだからどこかへ行けないものかと奥平さんに呼びかけてもらった。どうしても無ければ、ひとりで奥秩父でも縦走しようかと思っていたが、幸運にも三井さんから堂倉谷のお誘いをいただいた。

水の流れる沢、また泊まりでの沢も今回がデビュー戦となる。それが南紀とは、なんてラッキーなのだろう。水に浸かるとどのくらい冷たいのかもよくわかっていない身なので、準備段階から着替えの量などがイマイチピンとこない。けどいろいろ教えてもらいながら、出発当日を迎えた。

28日22時に三井さん宅を出発。車で富士以西は行ったことがなく、物珍しい地名やネオンを食い入るように眺める。名古屋を過ぎたあたりで私は眠くなり、気づいたら奈良の山間部だった。翌朝、低温だったため、大台ヶ原駐車場をゆっくり出発。入渓地までの途中で日出ヶ岳の山頂を通過。大台ヶ原のどこが百名山だろうと思っていたが、あとでここだったと知った。

入渓ポイントの手前の堂倉滝は見事な水量、滝壺はエメラルド色で、素晴らしい。ここまでの登山道で早速すっ転んで腫れた足を冷やしながらか、滝の上はどうなっているだろうかと楽しみだった。

しかし楽しかったのはそこまで。さっき



【堂倉滝】

の滝の上で入渓。目の前の滝は幅いっぱいにはドバドバと水量が多い。ので、巻いていく。笹を掻き分けて進むのは初めて。踏み跡があるから楽、だそうだけど私にはきつい。全然進まず、三井さんはすぐに藪の向こうへ消えてしまった。上へ行ったのか水平移動したのかすらわからず、口笛のする方へガサガサと進む。しなった枝がバチバチあたり、あとで手首の無数の傷を見てびっくりした。あと、喉がすぐに乾くので沢の水を飲んでばかりいた。それ以外のことは残念なことに記憶にない。へつりもあった、らしいけど覚えていない。クタクタになった私は無言でテン場に到着。沢の中でのキャンプは初めて。水の音と薪が燃える音しかしない静かな夜は、凜とした気持ちにさせてくれる。

ゆっくり眠り、荷物も軽くなったことで翌日は少しは余裕があった。滑ったり落ちたりで、泳ぎがないのに一人だけ頭まですぶ濡れになりながらの遡行。それでも綺麗な釜や新緑に励まされた。終始、三井さんの見よう見真似で登ったが、動きが見えなかったところは登ればいいのかわからず、時間がかかってしまう。最後は大きな

滝の連続で、ここ落ちたらやばそうだな、とヒヤヒヤした。水を受けながら登る箇所もあって、腕や首からどんどん冷たい水が入ってきて厳しかった。ビレイの仕方とか、見ておければよかったが、なかなかそんな余裕は無かった。途中、カモシカがいた。

駐車場に戻ったのは夕方で、体力は限界を越えていた。予定より遅かったので、翌日の行程はどうするのかなあと考えた。もしこのまま帰るとしたら、残念ではあるけれどそれはそれでありだと思っていたら、三井さん「琵琶湖まで今日高速1,000円だっけ?」。あ、やっぱり行くんだな・・・と、そのときはこれまでの苦勞を思い出して肩を落とした。

途中で立ち寄った日帰り温泉で汗と疲れを流すと、少し元気になった。琵琶湖の湖畔にある道の駅で一泊。沢の登り方について、三井さんから教えてもらった。翌日に活かすことが出来れば・・・

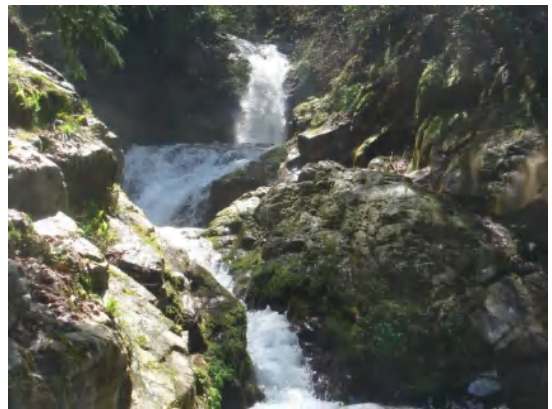
翌日、奥の深谷は日帰りだったのでほとんど空のザックで軽快に歩くことが出来た。やはり水量は少し多いそうだけど、沢自体、道倉谷より少し優しい雰囲気。

前夜三井さんに言われたことを心がけて進んでみる。おかげで昨日よりペースがよくなった気がした。体も沢に少しは慣れてきたようで、遡行図を見たり、景色を楽しんだり記憶する余裕も幾分持つことができた。シャクナゲが咲き始めていた。

岩の上でひやっとしたり、足が水にすぐわれそうになったり、震えてしまうときもあるけど、水の流れはとても綺麗で、体ひとつと限りある装備だけでの遡行は、普通

の登山道を歩くこととは全く違って沢の楽しさが、今回分かったような気がした。天気もよく、楽しい沢だった。

今の私にはちょっとハードで、せっかく遠くの沢にはるばる出かけられたのに、あいまいな記憶しか残せなかったのが本当に残念。もっと体力や技術を身につけたいなと思った。最後に、お誘い&指導してくれた三井さん、フォローしてくれた白土さん、本当にありがとうございました。



【奥の深谷】